

江南の民屋(上)

藤田元春

昭和三年十二月、命により専門教育視察團の一行に加はつて長江沿岸に向ふ。上海から杭州蘇州、さては新らしい國民黨の首都南京から、鎮江、九江、大冶、漢口、すべてが長江航路の地域以外に出でないで、極めて平凡な旅程であり、觀光の旅さしても別段面白味はないが、兎に角命ぜられた丈の一月を歴遊に費やしたことであつた。時恰も排日の聲、都鄙に喧しい折柄であつたから、自由に田舎廻りが出来なかつたけれども、上記都市を視察する上には何等の支障も無く、却つて日貨排斥の真相を明にし、併せて新興の政府が、いかに都市經營に熱中してゐるかを學んだのであつた。従つて予の上記の題目に關しての、材料蒐集には極めて不便であり、都合であつたから、こゝにかやうな題目を掲げて發表するのは、いかゞかと考へる。けれども出發に際してから、既にかうした試を企て、渡支したことである。材料が不十分だから、沈黙するに忍びぬ。いづれば三遊四遊の機會を得て、かうした研究を進めてみたい希望があるので、今回は見た丈けを報告して備忘に供する。この點敢て讀者の諒とせられんことを祈るのである。

一 江南の概観

さて江南といへば此緯三十度がその大體の中心緯度である。漢口と杭州の位置がこれに近かく、上海及南京は三十一度から二度の間に位する。従つてこれを北緯四十度にある北京や、北緯三十六度に位する濟南に比べて餘程南になる。換言すれば江南の平野はこれを河北山東の大平原、過去の中原に比して遙かに暖かい。悠々たる江水は、嘗ては魏文皇帝丕をして、天の南北を限る所以也と嘆息せしめた所であるが、これは單にその江水の渡りがたいといふ自然的の障害を述べたのみではないと考へる。之を軍略上から見れば長江は決して安全な國境ではない。國境は寧ろ之を越えて黃

河揚子江の一大平野に統一される地形である。しかし緯度でその差約十度にも及ぶ以上は、太陽との距離もちがふ、氣候の上から北と南とはその趣を異にするものといはねばならぬ。北方は温帯の中でも冷帯に近いが、南は餘程温い暖帯である。加ふるに地質上からみると黄河の平野には所謂黄土層の被覆がある。否黄土層を流した冲積地の原野である。しかし長江沿岸までくるとさうした風積の黄土がない。勿論黄土に似たやうな堆積層を所々の山ふところに見ないわけではないが、その色澤がちがつて、北のやうに黄色でない、も少し赤味が多い。従つて揚子江の濁流は、黄河の濁流ほどに帶黄黑色にならなくて、帶黄褐色である。水量も黄河は一年平均十萬八千方呎と稱せられてゐるのに比べて、長江の方は漢口で年平均五四〇・〇〇〇立方呎。江口で六四〇・〇〇〇立方呎に達する(長江要覽に従ふ)から、ざつと六倍からの

水量がある。その運搬する泥砂で、高さ九十呎面積一平方哩の州が、毎年一つづつ出來るとさへ稱されてゐる。

黄河の方は砥柱の嶮を出てからさき、渤海に至る一千三百六十支那里、途中にその水勢を阻む瀦匯の何物もない。古くから千里一曲ととなへる、一瀦千里、豫想以上に速い流れで(流速五哩以上)油の如き濁流が通つてゆく。之に比すれば長江は趣がちがう、三峽の嶮を出でて後海に達する水道は、黄河の如く直線的でない。宜昌から江口まで一、〇九七哩の水路は蜿蜒として大きい蛇行をなすのみでなく、所々に古い岩脈が之に斜交して江岸に迫まるので、天成の峽門が出來てゐる。さうした關門の一つを越えると、その中に廣大な陷没盆地がある。たとへば宜昌から漢陽の大別山下の狹窄水道に達する間は、古への雲夢の大澤であり中に今も猶洞庭の太湖を包擁する。次にこの大別

小別、及蛇山の丘陵は東南に走つて湖廣と江西との境になるが、やがてその東に進めば鄱陽の大澤を抱いた南昌の大平原となり、更らに東して小孤山から馬塙の嶮要をすぐれば蕪湖の肥沃な平野になる。こゝにも雙湖(巢湖)といふ湖水があつて安徽低原の中心をしめ。ついで東西梁山から采石磯焦山島等の嶮要をすぎて、やがて江蘇浙江の沖積地に入ると、こゝにも吳の大湖が千年の水を湛へてゐるのである。

蓋し揚子江は上に四川の盆地があり、下流に具區の平澤がある。その中間に於て猶三個の大盆地がある。さうした瀦滙陥没を埋めて、而して流れるのであるから、水流自から停徊して速かなるを得ない。夏時洪水の時には、一時間の流速四哩に達する江水も、冬期の、減水期には僅かに平均二哩にしかならぬ。かうした水路の形勢は、黄河のそれと全く違つた要點である。茲に於てか河北の

やうな黄河氾濫の、半ば砂漠性をしめした平原に比して、長江の方は見た目にも差がある、山が近くて雲漢々、江岸の楊柳自から烟霞の裡に入り、天邊の歸帆際涯をしらぬやうにあつても、河北はごに廣い景色にはならぬ。しかもその平地たるや元來が陥没地であつて、湖成平地であるから、灌溉の便が多い。河北の平原では黄河の水を引くことなどは思ひもよらぬことで、すべてが井戸水で灌溉をしなければならぬから、自から陸田の平地無邊際に連なるが、江南は之に反して經涂溝澗が縱横に通じ誠に豊沃な水田になつてゐる。氣温も高いから米作に適し棉や茶もしくは桑漆の利が多い。之を粟稷菽麥を主とする河北に比して、その農業地としての環境がちがうのである。

かうした自然地理の差は、自から農村としての江南の特色をつくらねばならぬ。

二 河北の村落と江南の村落

滬杭甬鐵路にのつて、杭州や蘇州へ觀光に行く人は、誰しもこの地方の平野水田の様子が、我國のそれに一致することを見るのであるが、南京から鎮江までの江岸の水田も、亦全く同様であつてその畦塗溝洫が、正しく南北及東西の條里に従つてゐることを知りうるであらう、さうした江南の水田地の中に散居してゐる農家のたゞすまひが、これ又水田を主とする我國とその類似を見出しうるのも驚くに足らないことかもしれない。しかしこれは北支那の黄土の平野では見うべからざる情趣である。あちらでは時に風がふきまくつて、所謂紅塵萬丈天日爲に暗澹たることもあるが、山東の德州から平原あたりの、どこまでも長く／＼つゞいた畝地の畦と、その廣大な地割の上に三頭立ての牛馬の犁をうごかしてゐる農夫の姿とに見慣れた眼には、同じ支那でも南北の差がいかに著しいことに氣がつくであらう。北方では雨量も南方

ほどに多くない。河の水量も少いから、灌漑のためには、是非とも井戸を必要とするが、その井戸さへ稀に見うける程の廣さである。乾燥しやすい土地であるから、自から飲料に供せらるゝ清泉とか井戸水が、かうした一望無涯の平野に於ける村落の位置を決定する場合が多い。且土匪や馬賊の襲來に備へるために、一つの村落に密集して、一郷としての集團をつくる必要がある。茲に於てか河北では到る所で、土城とか石壁をもつた村落を見るのである。津浦山東の沿線には、石灰岩の切り石で圍んだ村があるが、洛陽の南の望城崗や二郎廟などといふ二つの村落の如きは、予の通つた際、二村共立派な磚壁の高い城壁を有してゐて、閭門が存在してゐた。

この閭門をつくるといふことは、支那では餘程古い習慣であつて、「管子」首憲の章にも

十家爲什、五家爲伍、什伍皆有長焉、築障塞匿一

路、モツバラニシ博出入、審閭閭、慎筦鑿、筦藏里尉置閭有司、

以時開閉。閭有司觀出入者、以復千里尉凡出入不時、衣服不中閭屬群徒不順於常者。閭有司見之復無時。

とかいてある。果してかうした行政があつたとすれば、西紀前七世紀に、既にかやうな閭門が、今日望城崗にみるやうなものがあつたのではなかつたか。蓋し河北や山東、河南の村落といふものが、什伍の制に従ひ、組織的になつてゐたことは「國語」「管子」などに記され、「周禮」の小司徒や、族師の章にはその組織を明記し、閭胥といふ村長名まで出てゐる。(注、閭は廿五家である)。故に少くとも一村二十五戸乃至三十戸内外までの密集部落が出来てゐて、行政、兵事、徵稅、教育其他萬般の基礎になつてゐたとみえる。

予はかうした古典にあるやうな村落の型式を、曩に河北の各地で實見した。平原の南の黄河涯といふ村の如きは、一村數十戸で、障築は半ば破れ

てゐたけれども、村の中央に大鼓をもつた望樓があつた。要心に見張り番を置くやうにも見えた。

蓋し河北では村落としての機能又は統制といひ、村落型式としての集團といふ形がいちじるしく眼に入るのであるが、今江南に來つて之を見ると、さうした村全體を包んだ築障がない。予は前後二回、同じ土地を見て歩いたが、村には殆どさうした閭門といつたり、望樓といふべきものや、土城といふものを見たことがない。

勿論江南でも松江府、嘉興縣の如き縣城や、古い彭澤縣といつたやうな所、所謂江岸の通邑大都は、いづれも北方と同様な城壁をもつてゐる、しかし一步村落に出ると、全くさうしたものが無い村としてのシマリがないのが普通である。しかしよく之を見ると各戸には戸毎に築牆を有し、或は土塼或は石垣を遠ぐらすものもあるが、それも特に地價の高くて、富者の居住する、西湖々畔葛嶺

の麓とか、特嶺一帶の避暑地などに見る特別例である。田舎の田圃の中の民家とか、溝岸の楊柳のかげなどにある民家は、多くは樹木を疎らに栽えた所の所謂生牆をもつに過ぎない。それに竹柵や稀れに石垣の壁を立てゝゐるのがある。大きさも二

三十歩平方位が普通で、中には狭い小さいものもある。さうした小さい民家が多くは廣い田野の中にポツリ／＼孤立し散在する。稀には江隄の路傍に並び立つてゐて、街村式の並列をみることもあるが、江南一帶の村落は、之を大觀すれば散村である。しかもその散居した一戸々に森がある、藪があるといつた鹽梅である。孟子の所謂、

五畝之宅 樹之以桑 五十者可以衣帛矣

といつた、その五畝の宅、牆下に桑を栽えたその古い形が今もかやうに残つたかと考へしめるに過ぎない。

我國の緯度は北緯三十六度が中心であつて、長

江よりも北にあるけれども、暖流の影響でその氣温は暖帶性の所が多い。雨量も多いために、自から水田の國である。我々が江南の風景を見て、氣持がよいと思ふのも、全く同様な自然環境に存する類似の村落景がある爲めではないか。

拙著日本民家史に於て、予はかうした一戸々々の周垣的生垣の内を、「カイト」垣内式住居と呼んだ。越中のカイニヨ、江州のカケト。丹波のカイチ、四國のヤガコヒ、九州のクネギ、志摩國府のクダガキ、駿遠地方のマキ。出雲今市附近の生牆數へきたれば、日本の村落景の核子をなすものはすべてこれ垣内である。従つて支那の河北の村落景に見らるゝ、土城式の村落は少ない。しかし、その形式に似た密集部落の全體が、森の中に包まれてゐる形が全く無いといふのではない。例令へば近畿、中國の村落の中には、周圍に築障をめぐらすばかりの密集部落があつて、往々にして土壘

環濠又は竹の藪をもつのがあるが、さうした一密集の部落でさへも、その中の各戸は、戸毎に牆をもち樹を栽えてゐるのである。それが一步進んで町家建になると、さうした築垣はなくなるの例である。それでも京都の加茂又は奈良の社家町といった所には、猶古い形をのこしてゐるのが多い。換言すれば日本の村落では、河北の型式に似た築障式村落と江南の型式に似た散居式垣内の村落との中、江南式のものが比較的多く分布してゐるのである。

予はさうした考で、支那江南の民家を見て、もしもこの楊柳の森が厚く茂つたならば、これは慥かに越中富山邊の平野の、散村に似た村落景になるであらうことを、面白く觀じたのであつた。これを同様の氣候、地味といつた自然環境の類似が類似の居住形式を育くむだと思ふか、もしくは同一文化の東漸した結果と見るかは、その人々の考

によつて變はることであらうと思ふ。予はこの江南地方の散村を以て、直ちにそれが日本の他の多くの地方に見る垣内式村落の發祥地だと、一足飛びに論定するのではないが、しかしこの際古い時代からの日支交通、特に吳の地方との頻繁な交渉を想ひ出す時に、かうした類似を單に自然環境が等しいからだとのみには解釋し得ないのである。應神天皇又は雄略天皇の朝に、吳國との交際が誠に著しく發展したことが書紀に出てゐるが、日支の交渉はそれよりも猶古い時代から引つゞいて行はれてゐたのであるから、或は江南の村落の中に我國村落の原流を見出し得ないわけでもなさうであると同時に、日本の民家又は村落の形の上に、古い支那を反映してゐるものがあると思へて差支へないと思ふ。

三 江南の散村

支那のやうな廣い大陸へ行くと、都會といふも

のが、非常に疎らに位置する。假令ば漢口、上海六百哩の間に、これほど思はれる都邑は南京、安慶、九江位のもので平均百五十哩をへだてる。長江通ひの汽船でこの間凡そ一日がかりである。さうした通邑大都がこゝに出來たのは、いかにも自然地理的事情が永い世紀をへて、自からかやうにしたもので、大抵の處にその地の古文明を表象する巍然たる古塔佛寺をもつてゐる。さうした古塔

の過去を背景としての下町は、大厦高樓軒を並べ薨を接し、その狭い一間半内外の街路に、無数の苦力が肩摩轂撃の熱闘ぶりをしめすので、いかにも人口の多い國だと思はせるの例であるが、さて一步町を離れて次の港にゆく迄の二十四時間、それは何といふ静けさであらう。これは北支那での通邑大都相互の陸路の間にも同様ではあるが、陸路には十里廬あり、三十里宿ありで、通過の經路に密集村落を見るのであるが、江南の江岸では、

さうした密集村落さへも稀になる。あちらに一戸こちらに二戸、楊柳の古堤の中に孤立したアバラヤが多く、村童が水牛の背にのつたまゝ、草原の中を動いてゐたり、鳥がさうした牛の背にとまつてゐたりする外に、一望果のない無人の天地がつゞくのである。

由來支那で人口の最も稠密だと稱せらるゝ江蘇浙江の平野、滬杭甬鐵路の沿線でさへも、とても淋しい停車場が多い。松江や嘉興などいふ縣城に近づくとき、著しい古墳群が眼につき、さうした古墳の附近、運河の堤、小さい塔のある小山の陰などに貧民の密集した部落が目に入るけれども、これを離るゝに従つて民家は稀薄になつて、遠くに疎らな森があり、その中に二三戸位の孤立村落を見出すに止まるであらう。

かやうな次第であるから、支那の都會と村落とは、その開明の度が雲泥の差である。日本歴史で

奈良朝や、平安朝の華麗を學んでも、事實に於て當時の庶民階級の文化は格段の差があつたやうに、支那の文化は都會文化である。都市居住者のみがエンジョイしてゐる文化である。

一步郊外に出ると太古の趣のある無學の農村である。三千年以前の稼穡の方法が、そのまゝに遵守されてゐる國である。魏の馬鈞が紀元前三世紀に發明したと稱せらるゝ龍車、宋の蘇軾が見た同じ龍車が今も猶江南唯一の灌漑要具であり、中には足踏みの水車で水を灌いでゐるのがある。「高士傳」には子貢が楚に行つた時、漢陰の丈人が猶甕を抱いて畑に灌いでゐたのを見て、驚いて棹を用ひよと告げたと、書いてあるが、今日猶漢陽の郊外の蔬菜園に於てさへ、棹

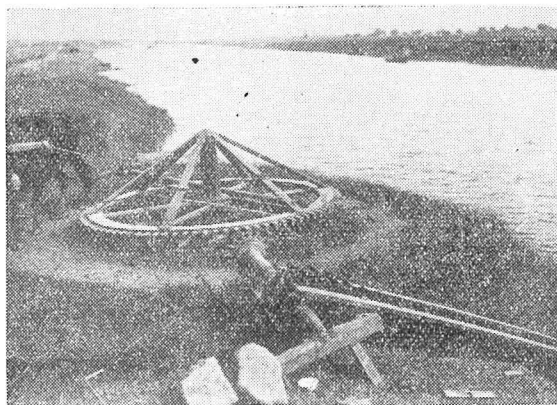
のあるのが稀であるのである。道路なども上海や九江の市黨部でつくつてゐる、近世のコンクリート道や、アスハルトは、いかにも堂々たるものだが、しかし郊外は昔のまゝで、諸葛孔明の發明した一輪車が通じうる

に止まつてゐる。茲に於てか、かうした農村を仔細に研究することによつて、我等は古い時代を目前に學びうるのではないかと考へる。江南の景況を概説したと考へる。筆を更めて予の見た民家そのものに就て語るであらう。

四 アンペラの家

江南で予の見た民家の最も粗末

なものは、方丈(九尺内外もあらうか)とでもいふべき、簡單なフレームの上に蘆でつくつた(編蓆)



民家の屋根となり、壁となる。江南は暖かいからさうした壁に土は用ひない。側壁には二枚位を重ねる。屋根は一年に一枚づつ、二三重で上へ上へと重ねる。多くは切妻の屋根になる。家の高さは六七尺で、戸口にもアンペラがある。前面妻入左方に入口がある丈で、四方に窓がない。その中は土間である。そこに焜爐二つ位、竹製の寢臺二つ二つ、卓子一脚椅子二三、それ丈でも一戸の風雨がしのげる。漢口の町はづれにこの種の民家が多い。食事時になると多くは戶外に出でて、椀どはしどを持って、立ちながら食つてゐるのを見受ける。往々之を平入にして工場兼店頭にしたのさへある。

五 舟 居

南船北馬といふ國である、江蘇浙江にはいかに溝渠が多い。自から我國の瀬戸内と同様に水上生活者が出来る。一生を舟の上で過ごすのである。先年上海徐家匯の溝でさうした一群を見たが、今

度は蘇州での水窟を見た、或者は船をそのまゝ陸上に引揚げて、生活してゐる。長さ三間幅五尺位の方船である。蘆のアンペラ葺である。船を三分して左端の一區は厨房である。竈が二つ、鍋三枚。中央は客室で、小供がねてゐる。蒲團をしいてゐる。右端は老人の寢室である。萬年床らしい。三區分の繼目には、屋根がなく通になつてゐる。雨がふればアンペラをかけるから、都合五枚で隠れてしまふ。權は前後についてゐて、中年の女がこいでゐる場合が多い。廣東あたりにはまだく大きい舟居があつて、鶏や豚などを飼つてゐるのさへあるといふことであるが、まだ見ないからわからぬ。かうした舟居の狭いのにも、厨房の外に猶二室をもつことは注意すべきことであると思ふ。何となれば普通の民家でも平入三間であるのが常法であるからである。この事は後節に於てのべるであらう。